



日本列島  
病院探訪  
全国の特徴ある  
病院を取材する  
“フォルテ”



# “FORTE”

IMSグループ 医療法人財団 明理会

明理会東京大和病院

Meirikai Tokyo Yamato Hospital

## 腎臓・泌尿器・女性医療のエキスパートが集う 現役世代のニーズに応える都会型病院

Interview「ドクターズマガジン編集部」 Text「佐藤恵」 Photograph「緒方一貴」



# 想

明理会東京大和病院を  
漢字一文字で表すと

相手を想う“心”、相手を想像する“目”、これを“樹木”のように育てていく。ホスピタリティを大切に、成長を続ける大和病院を表す一文字です。

院長  
明樂 重夫

Shigeo Akira

## 東

京屈指のオフィス街・大手町から、電車で約20分。

東京23区の北に位置し都内勤務者のベッドタウンとして人気な板橋本町駅に直結するのが明理会東京大和病院だ。半径2キロ圏内に大学病院2施設、総合病院2施設を有する医療激戦区で、駅近という利便性を生かしながら、現役世代を意識した病院運営をしている。

1976年、IMSグループ唯一の腎泌尿器系専門病院「大和病院」として開設され、2012年には「東京腎泌尿器センター大和病院」にリニューアル。専門性・独自性を維持しながらも婦人科や外科系の診療科を増やし、実態が病院名を超えたことを受けて、2022年4月、女性医療のエキスパートである明樂重夫院長の招聘と同時に「東京大

	3		1
6	5	4	
	8	7	2

1. 病院外観 2. 院長の明樂重夫氏 3. スタッフステーションの様子 4. 血液浄化療法センター 5. 手術室 6. da Vinci手術風景 7. vNOTES(経腔的腹腔鏡手術) 8. 女性医療センターの打ち合わせ風景



和病院」として新たなスタートを切った。  
 地の利はもとより、最新鋭の手術ロボットや内視鏡による低侵襲治療・手術の推進と、オーバーナイト透析などによる患者負担の軽減を通し、働く人たちが無理なく通える都会型病院的舵取りをする明楽院長に話を伺った。



# 1

## 最新の女性医療を極める 骨盤底医学のトップランナー

交通機関も医療施設も充実している都心部で、選ばれる病院になるために必要なことは何か。都会型病院の真のニーズに照らし合わせた結果、明楽氏は「選択と集中」を経営の支柱に据えた。「総合病院として17の診療科を網羅しつつ、当院の優位性が示せる腎臓・泌尿器・女性医療の3分野をセンター化して注力し、日本一を目指す。その一つが、私が専門とする女性医療です」



婦人科をはじめ乳  
腺科、皮膚科、整  
形外科、リハビリ  
テーション科等と  
連携し、女性のト  
ータルヘルスケアを  
行っている。低侵  
襲手術に重点を置

従来、産婦人科は「周産期」「腫瘍」「不妊」の3領域に分けられてきた。しかし女性の疾患に長く携わってきた明樂氏によれば、子宮内膜症一つとっても、月経困難症から不妊、やがては卵巣腫瘍に影響していくことがあり、生涯にわたって診ていく必要があるという。女性の医療を「点」ではなく「線」で捉えるのが明樂氏の信条だ。

「15年後、20年後を見据えたいうえで、今最適な治療を選択すること。これこそが女性医療の強みなんです」

前述の3領域ではカバーし得ない、婦人科と泌尿器科がクロスする領域について、欧米では「ウロギネコロジー（骨盤底婦人科学）」として確立されている。日本では、日本更年期医学会が日本女性医学学会と名称変更したのが2011年と歴史は浅いが、同院には女性ヘルスケア専門医が3人在籍する「女性医療センター」がある。同センターは、

く内視鏡・ロボット手術部門には、常勤医として子宮鏡技術認定医5人、腹腔鏡技能認定医5人が在籍しており、2020年度には子宮内膜ポリープに対する子宮鏡下手術件数が全国一位となった。

「認定医は専門医よりレベルが高く、取得には8年かかり、全国的に人数も多くはない。当院は婦人科の内視鏡手術に特化しているので、エキスパートがそろっています。症例が多いので技術指導もでき、さらに成長できる環境が整っています」

また、2022年から日本でもスタートしたVNOTES（経腔的内視鏡手術）をいち早く導入したのも同センターだ。VNOTESは腔に専用器具を入れ、腹腔鏡手術で用いるカメラや鉗子を腔から挿入して行う手術。腹部に傷がつかず、低侵襲で術後の痛みも軽く、早期の社会復帰が可能となる。

「VNOTESは、腹腔鏡手術にかなり慣れている術者でないとなさせん。当院では子宮筋腫や骨盤臓器脱に対する子宮全摘手術、および卵巣嚢腫に対する子宮付属器切除術に対して行っています」

骨盤臓器脱とは、骨盤の中にある臓器（子宮、膀胱、直腸など）

が加齢や経腔分娩による出産の影響で下垂し、腔から体外に出てしまうこと。高齢女性に多く見られ、排尿障害や尿失禁、出血を起こすことがあるという。

「アメリカでは10人に1人が骨盤臓器脱の手術を受けていて、実は日本でも患者さんは少なくありません。骨盤臓器脱の内視鏡手術については、間違いなく当院がトップランナーです」

骨盤臓器脱には、手術療法の外に補助器具による保存的治療がある。補助器具とはペッサリーというリング型の器具で、腔の中に挿入して臓器脱を防ぎ骨盤を安定させるもの。明樂氏は、患者視点に立った新たなペッサリーの開発にも携わったという。

「通常のペッサリーは、3カ月に一度医師が着脱しますが、新たに開発したA型のペッサリーは自己着脱できる。それだけでも感染や炎症のトラブルを軽減できます」

女性医療センターでは、骨盤底筋体操のリハビリも行っており、治療に関わる全てを提供できるのが特徴だ。

「当院は、一つの疾患について複数の専門家がスピーディに協力できるベストな規模感。横のつながりがしっかりとあり、センターが機能しやすいのです」

2022年4月の明樂氏の院長就任以降、内科系の専門医も増えている。糖尿病・内分泌・代謝内科と呼吸器内科にそれぞれ2人ずつ、脳神経内科と循環器内科にそれぞれ1人ずつ、合計6人の専門医が新たに加わった。

「医療レベルをさらに引き上げるべく、専門医を集めたい。幸い立地がいいので、募集をかけるとまず候補には入るようです。後は、ライフスタイルに合うかどうかというところでしょう」

開院当初からの看板である泌尿器科、院長がけん引する女性医療、仕事やプライベートを犠牲にせず治療を受けられるオーバナイト透析といった特色を打ち出す同院では、常に最先端の知識をキャッチアップし、技術を磨き続ける専門医が集まる。

「当院に来るのは、専門医や技術認定医です。しかし、専門医がいればいいわけではなく、彼ら



## さらなる高みを目指し 切磋琢磨し続ける専門医集団

をより高みに引き上げる施設でありたい。医師たちに学会発表という、対外試合を勧めているのは、日々の診療で手一杯になるのではなく、学問的モチベーションを維持してほしいからです」

もちろん、院内でも切磋琢磨できるよう、スキルアップに必要な体制は整えている。同院では、専門医、技術認定医取得はゴールではなくスタート。国内外の学会発表において世界で戦える医師の育成を使命としている。

また、整形外科で行っているシステムも医師のレベルアップに寄与している。システムは「開放型病床」とも言い、総合病院の機能や病床を開放してクリニックの医師と共同で診療を行うこと。同院は、肩肘診療に精通した「東京スポーツ&整形外科クリニック」と提携しており、院長であり日本肩関節学会理事長でもある菅谷啓之氏、股関節鏡視下手術のスペシャリストである宇都宮啓氏が同院で手術を行っている。

「名医中の名医でいらっしゃる菅谷先生、宇都宮先生に指導し



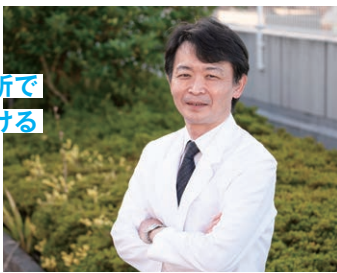


### ■ 血液浄化療法センター

#### オーバーナイト透析と旅行透析で 都会型病院としての進化を続ける

副センター長

服部 浩治 Koji Hattori



32台の透析監視装置を有し、月曜日から土曜日まで午前と午後の2クールに分けて一般透析を行っている同センター。2021年9月からスタートさせた「オーバーナイト透析」は現役世代にフォーカスした治療であり、患者のニーズは高い。

「仕事が終わってから来院していただき、寝ている時間を利用して透析します。通常は4時間ですが、オーバーナイト透析は8時間。ゆっくり進めることで身体への負担が少なく、高いQOLが見込めます」

オーバーナイト透析は関東での実施施設は多くない。しかし、同センターでは毎日当直の医師がおり、必要があれば入院に切り替えることもできる。また、多数の診療科があるため他科連携によって合併症治療が必要な透析患者も受け入れ可能である。

もう一つ、2023年から始めたのが「旅行透析」。文字通り、旅行者への透析治療を行うのだが、海外からの旅行者も受け入れているのは都内でも当院くらいだという。

「対応言語は英語と中国語で、台湾とマレーシアの方を受け入れた実績があります。旅行をあきらめていた透析患者さんに、ぜひ活用していただきたい」

他院との差別化を図る治療に、果敢に取り組む血液浄化療法センター。その原動力は「チームの結束」と服部氏は自負する。

「ちょっとした問題なら、廊下ですれ違ったときに話して解決できることもあります。個々の専門性は高いけれど人間関係の垣根は低い。ギスギスした雰囲気は全くありません」

オーバーナイト透析や旅行透析を推進しつつ、地域に根差した病院としての意識を強く持つことで、高齢化に伴う透析患者の増加に対応していきたいと語る。

### ■ 泌尿器科

#### 最先端の手術に対応する高いスキルと 盤石な診療体制で患者ファーストを実現

部長 高橋 淳子 Atsuko Takahashi



1都3県において、「泌尿器科といえば東京大和病院」と信頼を寄せられている同院の腎泌尿器センターは、「前立腺センター」「ロボット手術センター」「結石破碎センター」で構成されている。尿路結石で重要視するのは、短期間で結石フリーが得られること。日帰りや一泊入院で治療可能な体外衝撃波結石破碎術(ESWL)、内視鏡を用いた経尿道的手術(TUL)や経皮の手術(PNL)など、安全かつ確実な治療法を患者の病態とニーズに合わせて選択している。

前立腺肥大については、最新の経尿道的前立腺吊り上げ術をはじめ、接触式レーザー前立腺蒸散術(CVP)、ホルミウムレーザー前立腺核出術(HoLEP)を行っている。また、前立腺がんにおける前立腺全摘や腎臓がんの部分切除はda Vinciで行い、一週間以内には退院できるという。

「泌尿器科の医師は8人おり、1人はESWL専任のベテラン医師、7人は当院で行うほぼ全ての術式に対応可能です。医師による治療方法の偏りがないので、患者さんの状態や希望を最優先にできます。待機期間も、短くて済みます」

年間1,747件に上る症例数の多さが同センターの特徴。多くの経験値があるからこそ、情報共有や緊急時の対応もシステム化されている。

「手術による侵襲を減らし、トラブルのない安心・安全な治療を行うために、毎週のカンファレンスで全ての症例について最適な治療法を話し合っています」

高い医療スキルに裏打ちされた豊富な治療法、スムーズに手術が受けられる患者ファーストの体制、加えて、外来でも継続的にリハビリ指導をする手厚さにより、さらに患者が増えるという好循環が生まれている。

「都会では時間勝負の側面もある。特に、スポーツ選手は治療を待てません。小さい傷でより早く治すために、フットワークの軽さも重視したいところ。各専門性を、加速度的に高めていきます」

年間の手術件数が約4000件と、病床数168床の中規模病院としてはかなり多い。それを支えているのは、万全のチーム医療だ。明楽氏の院長就任以前からタスクシフトに代表される多種連携の風土が根付いていて



#### 「イマジン・ペイシエント」で 患者のためのチーム医療を強化

3  
「医師は常勤換算で37.1人、職員は440人と、決して人数が多いとは言えませんが、当院にとっては適正だと思っています。みんなテキパキと仕事していますし、オン・オフの切り替えが上手だな、と思います」

「患者さん第一であること、チームの結束を強めること。病院としてのクオリティを上げ、患者さんの満足度を高めることを目標とし、実践してきました」

「イマジン・ペイシエント」を突き詰めれば、治療法や術式はおのずかからオートクチュールなんです。患者さんのニーズに合った医療は、どれだけ追求しても限りはない。全職員一丸となって取り組んだその先には、また新たな目標が生まれてくるに違いありません」